

死をどうしたら受けとめられるのか④

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

さて、私が死を考えるとというのは、自分の死に直面した時ばかりではありません。身近な人、親しい友人を失おうとしている時にも、「なぜ」という気持ちは強く働きます（いわゆる2人称の死）。その死の現実、やはり、受け入れがたいのです。それは、「生きていてほしい」という願いでもあります。

ところで、先頃、内閣府は自殺対策に関する意識調査の結果（2012年1月調査）を発表しました。これによりますと、自殺を考えたことがあると答えた人は全体で23.4%、前回2008年2月調査の19.1%よりも4.3%増えています。自殺（自死）を人生の選択肢として思い浮かべる、考えるときには、生きていることはただ「苦しみ」のように感じられている状態であると思われそうですが、換言すれば「生をどうしたら受けとめられるか」という状況であるとも思われます。それは、私たちの「存在」「生存」の意義や意味を問うということでもあります。

そこで、人間の生、その存在ということについて考えてみたいと思いますが、その前に、今回の内閣府の調査結果についての新聞報道を紹介しておきます。

「自殺を考えたことがありますか」

『読売新聞』は内閣府が実施した「自殺対策に関する意識調査」の結果について、以下のように報道しました（2012年5月2日朝刊）。調査は2012年1月に実施。全国20歳以上の男女3,000人を対象とし、有効回収率は67.2%。

自殺をしたいと思ったことが「ある」と答えた人の割合（ ）内は前回2008年2月調査時のもの

全体	: 23.4% (19.1%)
70歳以上	: 15.7% (12.6%)
60歳代	: 20.4% (12.9%)
50歳代	: 25.7% (19.9%)
40歳代	: 27.3% (19.1%)
30歳代	: 25.0% (27.8%)
20歳代	: 28.4% (24.6%)

年代別では20歳代の28.4%が最も多く、特に20歳代女性は33.6%と、前回調査(21.8%)から大幅に増えている。(中略)

年代別では40歳代の27.3%、50歳代の25.7%、30歳代の25.0%と続いた。すべての年代で女性が男性を上回っている。

また、自殺を考えたことのある人のうち、「最近1年以内」に考えたと答えた人も、20歳代の36.2%が最多だった。20歳代女性に限定すると44.4%に上った。

警察庁の統計によると、2011年の自殺者3万651人を年代別に見ると、最多は60歳代の5547人(18.1%)で、次いで50歳代の5375人(17.5%)が多かった。20歳代は3304人(10.8%)で、実際には思いとどまっている人が多いとみられるものの、内閣府は「周囲のつながりが希薄で、相談相手を見つけられずに一人で苦悩する若者の姿が浮かび上がる。若い世代に焦点を当てた対策が必要だ(自殺対策推進室)」と分析している。

また調査では、「生死は最終的に本人の判断に任せるべ

きだ」と考える20歳代が50%に達しており、3割前後だった他の世代より多かった。「若年層ほど自殺への抵抗感が薄れている」との見方も出そうだ。

(<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/whitepaper/w-2011/pdf/index.html>「平成23年版自殺対策白書」も参照)

なお、「生死は最終的に本人の判断に任せるべきだ」と考える20歳代が50%に達したのは、「自殺やうつに関する意識について(1)自殺についての意見」への回答で、自殺について6つの意見、「a.生死は最終的に本人の判断に任せるべきである」「b.自殺せずに生きていければ良いことがある」「c.幼い子どもを道づれに自殺するのは仕方がない」「d.責任を取って自殺することは仕方がない」「e.自殺は繰り返されるので、周囲の人が止めることはできない」「f.自殺する人は、よほどつらいことがあったのだと思う」に対してそう思うか、思わないかを聞いています。

現代人の生と死

前項の「生死は最終的に本人の判断に任せるべき」という意見は、この場合、「自殺についての意見」の回答として提示されたものでありますから、これに対して肯定的な若者が増えたという結果については、深慮する必要がでてきます(これが終末期医療に対する意見として提示されたとすれば、その結果に対するコメントは、今回のものとは異なってくるでしょう)。自死の判断は周囲との断絶を彷彿とさせ、以前述べましたように、ただ、そのように「追い込まれた」ということが想像されますので、「追い込む」社会状況や人間関係を考慮した対策が必要になるのです。

一方、多くの識者が指摘するように、現代社会は、「生」をのみ追究しているとも指摘されます。たとえば、大峰顕氏は『宗教の授業』(法蔵館、2005年)の中で、「現代人は死を抑圧している」(30頁)とし、人間の存在は、生の意識と共に死の意識をもっていて、かつてギリシア人は人間のことを「死すべき者」と呼びましたが、昔の人々と現代人とでは死に対する態度に大きな違い、根本的な違いがあると述べています。「一言で言えば、現代人には、死という観念に対する極端な抑圧、あるいは異常ともいうべき強い拒否反応が生まれてきている」(31頁)というのです。それはマクス・シェーラーの「現代西ヨーロッパ人」という新しい人間類型によって示されるとしています。

この「現代西ヨーロッパ人」の特徴は、「人生の目的を仕事(Arbeit)ともうけ(Erwerben)にのみ見出している人間」で、「この人間類型にとっては、仕事と金もうけはもはや生存の手段ではなく、それ自身が人生の最終目的」(32頁)となっています。現代日本人もこの類型に相当し、現代日本の哲学は死をふくんだ生の意味を問わなくなってきた(34頁)と嘆かれています。こうした社会にあつて、人間の生死は、どのように位置づけられるのでしょうか。自死を人生の選択肢のひとつと肯定できるというのは、この死をふくんだ生の意味への問いがなされなくなったことに関連しているのかもしれませんが。今日の「死生学」が様々な分野に及んでいる理由はここにあるのでしょうか。